

日本留学や日本語学習における関西弁劇制作の教育効果：
複線径路・等至性モデル分析から見る留学生Bの変容過程から

柴田あづさ（長崎国際大学）

本発表の目的は、日本語力に自信が持てず、人前で話す際は震えや腹痛をもよおすほどのあがり症であった元交換留学生のBが、留学中の関西弁劇制作やその他の様々な経験を通して、いかに問題を克服し学び伸び進めていったか、その過程と要因を複線径路・等至性モデリング (Trajectory Equifinality Model, TEM 図) を用いて認識することにある。

TEM 図とは、人間の成長を時間的変化と文化社会的文脈との関係の中で捉え、研究者が注目した地点（「等至点」）までのその人が選択した径路を時間軸とともに記述し、図表化する手法である。TEM 図には、個人にとって重要な行為の選択である「分岐点」や、その行為を選択させた「社会的要因」、多くの人々が一般的に通る「必須通過点」が書き示され、個人の変容がわかりやすく可視化される。

調査は、半構造化インタビューにより行った。対象となったBは、欧米の大学で日本語を専攻し、帰国後は国の行政機関に勤務している者である。

TEM 図による分析の結果、Bが日本語の授業で関西弁による劇制作の活動を行うことに同意したことや、劇制作のメンバーと訪れたカラオケボックスで歌を歌ったこと、劇制作の練習で「恥ずかしがっている方がおかしい」とおもしろい演技をしてみたことなどが、分岐点となっていることがわかった。また、劇制作の練習において「日本語を遊ぶように学ぶ方法がある」ことに気づいたことは、必須通過点となっていた。そして、こうした経験から得た数々の学びが、Bが留学以前から抱えてきた異性と接することに対する不安や、留学直後から抱いていた日本語力の自信のなさを、克服させるきっかけとなっていた。この要因としては、劇創作の活動をとおして様々な参加者と友人となり支援されたこと、腹痛をもよおしながらも「失敗してみんなをがっかりさせたくない」と舞台上がって演技を成功させたことなどが、示された。